97年中国女文字調査報告

遠　藤　織　枝

97年４月27日～５月５日（以下「97春」と略記する）と、９月12日～20日（以下「97秋」と略記する）の２回にわたって現地調査を行なって得た結果を報告する。特に今回は中国が国として女文字をどう考えているかの報告と、女文字で書かれた長文の作品の紹介を中心にして行なう。

1.　国と省の女文字への対応

97年４月、湖南省の現地へ赴く前に北京へ行き、社会科学院語言研究所の研究員黄雪貞氏に女文字の音韻面での研究の協力を依頼した。

黄氏から研究協力の承諾を得たのち、同氏に中国言語学界での女文字の取りくみについて質問したところ、国は女文字は重視していない、限られた地域でしか使われなかったし、中国には方言が多くて研究しなければならないものがまだたくさんあるから、ということであった。

ついで、国家の文字研究の最高権威者である周有光氏を訪ねた。中国の文字研究、文字政策の中で女文字がどう評価され、どう位置づけられているかを国の立場で語ってもらえる人と考えたからである。

現在92歳の氏は今なお国家語言文字工作委員会委員と、社会科学院語言文字応用研究所研究員を兼ねておられ、耳は少し遠いものの、言語は明晰で、２時間余り理路整然と話してくださった。

周氏は1950年代から国家文字改革委員会に属し、比較的早い時期に女文字に触れている（注１）。周氏の話は以下のようなものであった。

女書 － nüshu －（江永県周辺の女文字の中国での呼び方　遠藤注）を知ったのは1956年、57年のころ。北京公安局に１人の女性が保護されたがそ

のことばがだれにもわからない。文字を書いたがだれも読めない。その公安局の人が訪ねてきてその文字がわかるか尋ねられたが、わたしはわからなかった。当時とても忙しくて、それにかかわる時間もなかったので、少数民族の研究をしているところへ持っていってもらった。民族学院の中にあった少数民族研究所でも、結局、だれも読めなかった。そのときは少数民族の文字だと思った。

この文字には、文字学、民族学、民俗学、社会学、歴史学などのたくさんの要素が入っているから、多くの角度から研究しなければならないし、その価値がある。

この文字は、漢字の影響を受けた少数民族、ここでは瑶族の女性が作ったと思う。中国には民間文字も多いし、方言文字も多いが、漢民族が作ると形声文字が多く表意文字である。女書は表音文字であるから漢民族が作ったのではない。漢民族と少数民族が交差するところで、少数民族が漢字のまねをして文字を作った例は多い。

この地の平地瑶－平地に住む瑶族－は漢語を使い、漢民族化が進んでいる。過山瑶－山地に住む瑶族－は瑶族方言を使い漢語は使わない。

今では、女書は平地瑶の女性によって作られた漢語方言だと思っている。

国家の文字委員会として女書は何の問題にもなっていない。国家文字委員会の仕事は、国で使う文字を合理化し、普及すること。少数民族のことばは各研究所、大学で自由に研究すればいい。国家の関与するところではない。

民族語言研究所、方言研究所もあるが、女書は漢語方言のひとつであるからそこでは扱わない。国として漢民族の方言の研究機関はないし、女書研究所のようなものもない。

国家文字委員会は国のきめた国家規模のことをするだけだし、中国には方言が多すぎる。

女書の他に、同じような女性文字はない。出てくる可能性は、ないとは言えないが非常に少ない。昔から、インテリ家庭に生まれたら、女性でもたくさん文字を知っていて、女性が男性と別の文字を使うことはなかった、女性だけの文字を作る必要は全くなかった、から。

女書の研究には現地の人で、教養層の助力が必要だが、その条件を充たす人は少ない。この文字はもうすぐなくなるだろう。

周氏の話にもあるように、少数民族である瑶族と女文字の関わりは強い。

少数民族については各省の民族研究所が研究し、実情を把握しているはずなので、湖南省の省としての女文字研究の状況を、湖南省民族研究所に手紙で問い合わせてみた。その返信は以下のとおりであった。

10年ほど前に江永の女文字が外界に知られるようになりました。我が所の関係員が初歩的研究をしたところ、民族学の研究範疇に入らないと判断したので、調査を続ける計画を立てませんでした。

当研究所は国の政府機関、湖南省民族事務委員会属下の科学研究機構で、現在我が省にいる少数民族が現代化の過程で出会う特別状況と問題を研究して、政府が民族問題を処理し、政策を決めるために参考になる資料や根拠を提供するのが主な仕事です。

湖南省民族研究所　李増夫　4月1日

理由はどうであれ、結局のところ、中国は国も省も、女文字を研究したり、保存の手だてを考えたりしてはいないことがわかった。

80年代後半からの趙麗明清華大学副教授ら数人の研究者以外に、中国で研究している人はいないこともはっきりしている。しかも趙氏らは義年華、高銀仙、陽煥宜の文字の研究を行っているが、その後の人については研究していない。

その後、4月29日、現地へ赴き、今まで5回の調査で行なってきたような、新しい伝承者と資料を探すこと、それと何艶新さん、陽煥宜さんの文字を把握することにつとめた。何艶新さんが10ページに及ぶ自伝を書いてくれていて、彼女の文字力を確認する有力な資料が手に入った。

1997年２度目の現地調査、97秋には、春に協力を依頼した黄雪貞氏の、土話－方言よりも狭い範囲の地域語－の音韻調査が加わった。個々の女文字の音韻を知ることが最終目標であるが、女文字は現地の土話を表記する文字なので、まず現地の土話の音韻を知る必要があるからである。

黄氏は、中国の方言調査の基本資料である「方言調査字表」の3000字の文字を１字ずつインフォーマントに発音してもらい、国際音声記号で書き取り声調の符号をつけていった。それと、この地の女性たちが古くから歌い伝えてきた歌を地元の女性に歌ってもらって録音した。こうして得た資料を今後整理分析し、女文字の音韻を特定していく予定である。

一方の、村々への調査では義年華さん（1907－1991）（注２）の書いた長文が見つかった。義さんは女文字のよく書けた人で、80年代後半、女文字が世に出たあと、駆けつけた内外の学者、研究者たちに多くの資料を提供し、女文字研究に大きな貢献をした人である。

2.　この地の女性と自伝

趙麗明氏の『中国女書集成』（清華大学出版社1992、以下『集成』と略記する）には、当地の女性たちが歌い、女文字で記したものが、10のジャンルに分けて収録されている。すなわち①賀三朝書②自伝訴苦歌③結交老同書④伝説叙事歌⑤祭祀歌⑥婚嫁歌⑦民歌⑧謎語⑨翻訳作品⑩書信、である。このうち④⑤⑥⑦は女文字に限らず一般的にも歌われるものであり、⑧はなぞなぞ、⑩は手紙、である。それ以外の①②③が女文字固有のジャンルということになる。これらに説明を加えると、

①は結交姉妹――血縁関係のない、仲のいい少女たちが義理の姉妹関係を結ぶこと、またその姉妹――の一方が結婚するとき、他の姉妹、また母、おば、姉などが結婚３日目に贈る冊子、②は自分の生いたちや生涯の苦しみを訴えるもの、③は結交姉妹の契りを結ぶときに交換する手紙、ということになる。

⑨はジャンルとしては一般的なものであるが、特異な点は、中国語の唐詩や物語の土話音化したものを女文字で表記したことである。

女文字はさまざまなものを書き表してきたが、その主な使途は①②③にあった。逆にいうと、これらを表現するのに必要だったのが女文字ということになる。

①③はこの地の女性たちが解放前の社会で深い契りを結び合った結交姉妹の風習と密接な関連があるが、②は特にそれとの関連で生まれたものではない。すなわち、自分の不幸な生い立ちや、姑からの圧迫、夫との不和など個人の生涯を一方的に綴ったものである。『集成』には36篇の自伝が収められており、篇の数だけでは同書中8.4%を占めている。しかし⑦の民歌や⑧の謎話などは1篇ずつが短いのに対して②の自伝は長いものが多いので、収録ページ数でみると②は全体の16.6%に及ぶ。36篇の中でも「義年華自伝」は469行の長い歌になっている。7字1行だから3283の文字が使われていることになる。

また、アメリカのChiang, William Weiの博士号取得論文「We two know the script : We have become good friends" : Linguistic and social aspects of the Women's Script literacy in southern Hunan, China (Yale University. 1991)によると、筆者Chiangが収集した資料142篇中13篇が自伝となっている。ここでは9.0%を占めている。量については記されていないので、その全体に占める量的な割合はわからない。

趙とChiangの研究から、自伝は女文字で書かれたものの中の約1割を占めていることがわかる。

96春、上江墟鎮の呼家村へ調査に行ったとき、高楓仙という79歳の女性が自伝を歌ってくれたことがある。女文字で書いたものを持っているというので見せてもらい、どんな内容のことが書かれているのか尋ねたら、その巻紙のようになった紙をのばしながら歌いはじめた。歌ううちに泣き声になり涙を流しながら最後まで歌った。紙はみているが1文字ずつ追っているようではなかった。つまり紙に書かれた文字を読んでいるのではなく、すっかり覚えてしまっているのを歌っていたのである。

そして、その歌の内容は、自分の辛い生涯を訴えるものである、と説明してくれた。彼女は女文字は書けない。自分が歌ったのを結交姉妹の姉に書い

てもらったのだという。『集成』にも義年華が書いた「楊細細自伝」「菊蔭自伝」「何羅疏自伝」などが収められているから、自分で書けない人が書ける人に自伝を書いてもらう例も多いことがわかる。

さらに93年の調査の際、少し女文字が書けるという朱雲娣さん（1939－1995）にインタビューしたところ、彼女は解放後の教育を受けたので女文字は習わなかったが、自分の母親の伝記を義年華に書いてもらって以来、女文字のすばらしさにひかれて習い始めたと語っていた。

また、黄雪貞氏の話では、黄氏の夫の姉が漢字で自伝を書いて残していたともいう。江永県出身のその女性は小学校しか出ていなくて、漢字も間違いが多かったが、自分の生活の苦しさや、自分の悲哀を書き残していた。彼女の家族は彼女が自伝を書いていることはだれも知らなかった。その死後、遺品を整理していた息子が見つけだした……。

この女性の場合は、他人に見せたり、歌ったりするための自伝ではなかった。書くことで自らを慰めていたのだろう、と黄氏はいう。

以上から、自伝を書く動機や目的を大別すると、他人に知ってもらいたい発表型と、書くことだけが目的の自己慰安型の２つがあることがわかる。自己慰安型も、高齢になって恥じらいが減ると発表型に転ずる可能性はある。

いずれにせよ、この地の女性たちにとって自伝を書くことは、特別な人が特別な目的で身構えて書くというような特殊なものではなく、自然で普通の自己表現行為の１つであった。

自伝または自叙伝は、表現型式としては古くから存在し、西欧では皇帝、哲学者、文学者のものなど、また日本では新井白石の『折たく柴の記』福沢諭吉の『福翁自伝』などが著名であるが（注３）これらはいずれもそれぞれの時代や社会の中での指導層・知識層に属した人たちのものである。

ところが、江永県女文字の伝播した地域の女性たちというのは、極めて普通の農家の娘たちで、地主とか学者の娘とかというような、特別のエリート層ではない。

この女性たちに、訴えたい悩みや苦しみが他の地の女性に比べて格段に多かったわけでもないだろう。解放前の女性の苦しみは、中国女性一般のもの

であったろう。となると、表現手段をもった女性たちは、自らその苦悩を表出することで、自己の憂愁を晴らし、聞く人とそれを共有することで慰め合う、いまでいう癒しの手段の１つをもっていたことになる。

日本の庶民も、西欧や他のアジア地域の庶民と比べると、より早くから文字をもったが、中世や近世の庶民の自伝が発掘されたという話は寡聞にして知らない。

今次の戦争での悲惨な生活を記しとどめたり、自分の生きてきた道を書き記したりするいわゆる自分史がカルチャーセンターなどで推奨されている。これも自伝の一種であろうが、この種の記録の発想が生まれたのは、ここ２、30年のことであろう。

中国湖南省南部の女性たちが、自伝を書くようになったのはいつごろか、どういう女性が書き始め、どのように広まったのか、また新たな疑問が生じてきている。

以下に、97春と97秋で入手できた２つの自伝をできるだけ忠実に紹介したいと思う。女文字部分は最初の１ページだけコピーで示し、歌は全文載せる。

はじめの義年華さんのものは、97年９月、義年華さんの孫娘陳早桂さんにコピーさせてもらったもの。これははじめ、陳さんの母親、つまり義年華さんの長女、蘆念玉さんが持っていたのだそうだ。しかし、母親は漢字も女文字も読めないから、持っていてもしょうがない、というので孫の陳さんが自分のところへ持ってきたという。陳さんの手に渡ったときから、漢字の翻字はしてあった、たぶん祖母が自分で書いたのだろうと陳さんはいう（義年華さんはこの世代の女性としては珍しいが、漢字も読み書きできた。遠藤注)。一方で、生前の義年華さんの文字を知っている周碩沂さんにコピーを見てもらうと、周さんは、義さんの文字はこれらよりもっと拙い書き方だった、といっている。

孫の陳さんの所有するノート（13.5cm×19.5cm）は、表紙に「義年華伝世文」と書かれている（以下「伝世文」と略記)。「自伝」とは書いていない。最初と最後に、郷政府へ自分の窮状を救ってほしいとの訴えがある。その意

味では他の自伝とは異なる。しかし27ページ626句、4382字に及ぶ「伝世文」の内容のほとんどは、生い立ち、母のこと、結婚、娘のひどい仕打ち、と『集成』の自伝と重なっている。自伝と銘うたないのは、政府への訴えを書いているからであろう。

では『集成』の自伝とどこが違うのか。まず、量がちがう。「伝世文」の方が157句、1099字多い。姑にいじめられたり、日本軍の侵略で山中に逃げまどったり、次女夫婦に罵られたりの箇所は重なっている。「伝世文」にしか見られないのは、義さんが郷政府の要請で少女たちに女文字を教えることになったくだりである。この女文字教室について『集成』の自伝はひとことも書かれていない。この教室は1987年から1990年の間に開かれているが正確な年月はわからない。義さんから女文字を習った盧早珍さんに尋ねたとき、盧さんは1990年に習ったが、義年華が死んで途中で終わってしまったといっていた。一方、前掲 Chiang 論文では1987年に開かれたと書かれている。女書の教室は複数回開かれた可能性がある。

この「伝世文」の書かれた時期を、女書教室開催、アメリカ人来訪などの記述を手がかりに考えてみたい。

「伝世文」には①「去年２月女書教室が開かれた」②「去年の10月アメリカ人が訪れた」③「ことし２月12日に婿が言いがかりをつけた」と記されている。

この去年と今年が何年に当たるのかがわかれば、「伝世文」の成立がわかることになる。まず Chiang 論文によると、女書教室が1987年に開かれたとされているから、「去年」も1987年、したがって「伝世文」成立は1988年となる。「アメリカ人来訪」の側からみると、Cathy Lyn Silber が1988年10月に現地を訪れているので（注４）「去年」は1988年を指し、「伝世文」の成立は1989年ということになる。さらに盧早珍さんの女書教室が1990年に開かれたとの話に合わせると「去年」は1990年、成立は1991年ということになる。しかし、この可能性はない。義年華さんは1991年１月26日に亡くなっているから、③と矛盾するのである。つまり、「去年」は1987年と1988年の両年を指していることになる。このことは書かれた年が２年にまたがっているか、

女書教室が一昨年とすべきを、去年としてしまった義年華さんの記憶違いか、いずれかによるのであろう。ここではそのどちらか一方が正しいと判断する材料がない。したがって「伝世文」の書かれた年は「1988年と1989年にまたがって」、または、「1988年か1989年」と言う以外にない。

いずれにしても、義年華さんの最晩年に書かれたもので、時間的、論理的に整合性のない箇所が多い。時間が前後したり、同じことが繰り返されたりして読む側は混乱させられる。しかし、これだけの長文を書き上げる表現力と語彙力、文字筆記能力は凡庸ではない。

何艶新さんのは「自伝」と自ら銘打って中学生用ノート（17.5cm×25.5cm）に10ページにわたって書かれている。96年３月、何さんを訪れたとき、何さんの文字能力が祖母から習った歌の記憶の他に、自分自身の想念の表現にも活用できるのかを知りたくて、何さんに自分で思うことをなんでもいいから書いてみてほしい、と頼んだ。

96年９月訪ねた際、何さんはつぎのように話した。「この夏自分は遠藤に言われて自伝を書いた。遠藤に内容がわかるように漢字訳もつけておいた。ところがそれを夫に読まれてしまった。中に、夫の悪いことも書いてあったので、夫は怒って破ってしまった」と。

そこで、改めてもう一度書いてほしいと頼んで、書いてもらったものが97春に入手できたのである。

かつての女文字の世界そのままのようないきさつの、貴重な資料である。

何さんの文では、自分の父の両親や父の兄弟のことから書き始め、自分が１歳半で父が殺される、母方の実家に身を寄せる、訴えをおこす、母が苦労して自分を育ててくれた、その母に強いられての不本意な結婚、夫の病気と、何さんの半生が時間どおりに伝えられる。

何さんの文の中に、義さんの文にもたびたび出てくる決まった表現が使われている。父を失った母が「守空房（＝空房を守る)」、子を失って「肝腸断（＝肝と腸を断つ)」、自分の不幸は「得知前世積了悪（＝前世に悪を積んだと知る)」、どうすることもできないとき「也想上天天無路也想入地又

無門（＝天にのぼろうにも天に道なく、地に入ろうにも地に門がない)」と書くなどである。これらのことばの使い方から、何さんが昔の女性たちの使った表現を体得し、自分の文章の中にそれを使いこなしていることがわかる。

何さんの表現技法について考えるのも興味あるテーマであるが、それは次稿に回すことにして、本稿では、2人の、女文字で書かれた自己を語る長文の、日本語訳を紹介するにとどめる。地名、年号などについてわかるかぎり注をつけた。翻訳の手順は次のとおりである。

「義年華伝世文」は女文字は筆で書かれ、その右横に漢字訳がついているので、その漢字訳を陳力衛氏（目白学園短期大学国文科専任講師）が粗訳し、遠藤が日本語訳にした。

「何艶新自伝」は何艶新さんの女文字を周碩沂氏（江永県文化館）が漢字訳し、それを陳氏が粗訳し、遠藤が日本語訳にした。

また、読みやすくするため、内容のまとまりごとに区切って小見出しをつけた。これは原文にはないものである。

注1　遠藤織枝『中国の女文字－伝承する中国女性』（三一書房1996）（注. 同書P.17で1950年後半、周碩沂が、北京に女文字資料を送り、周有光がもっと資料を集めるよう周碩沂を励ました、と書いたが、周有光氏は、この事実には触れなかった）

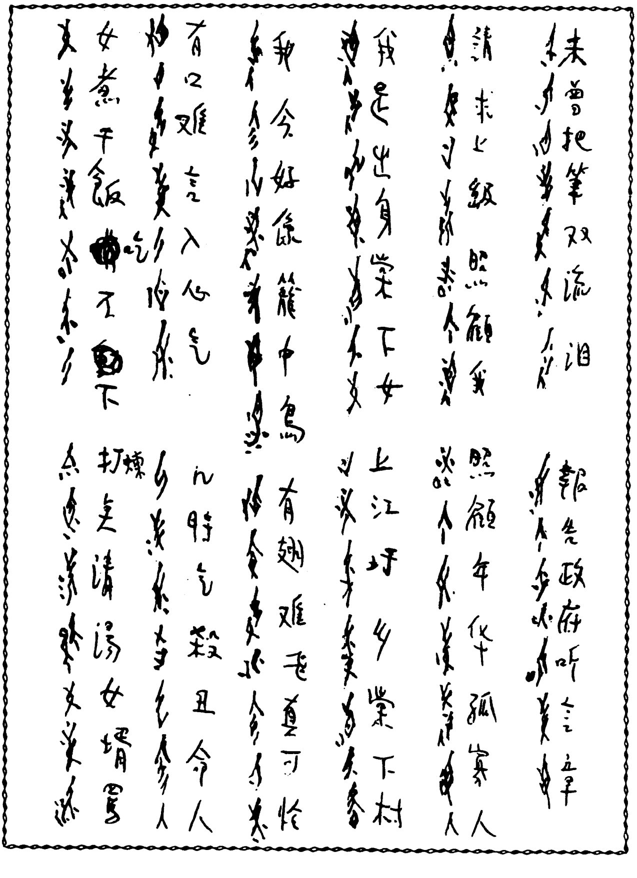
注2　同上　P.62

注3　『日本大百科全書』（小学館1986）の西田誠執筆による「自叙伝」の項目を要約した。

注4　“Nüshu (Chinese Women's Script) Literacy and Literature”
(Cathy Lyn Silber ミシガン大学の博士論文1995)

97春の調査研究は平和中島財団の97年度国際学術研究助成・アジア地域重点学術研究助成によるものである。

97秋の調査研究は、平成9年度科学研究費補助金「国際学術研究」によるものである。



「義年華伝世文」の第１ページ

義年華伝世文

1988年か1989年の作

1　政府への訴え

筆もとらないうちから涙が流れる
政府にきいてもらいたいことがある
どうかわたしの面倒をみてほしい
この年華というひとりぼっちのやもめを
わたしは棠下生まれの女
上江墟郷(1)の棠下村
いまわたしはかごの鳥
羽があっても飛べない悲しさ
口があっても言えない辛さ
いつかはわたしも勘忍袋の緒が切れる
娘はご飯を炊いてもわたしにくれず
みのない汁だけもらっても婿に罵られる

(1)現在は上江墟鎮

2　女文字教室と孫の言いがかり

2月に村の書記(2)が会議を開き
女書教室が決められた
中学ぐらいの娘が申し込みにやってきて
2月16日から教室が始まった
男の孫も女の孫も一緒に行って
孫たちも喜んで女書を学んだ
わたしも楽しく女書を教えた
午後は孫は学校へ行く(3)

(2)共産党書記

(3)2部制授業のため午後から登校する子もいる

夜はわたしが教える
娘たちは喜んで女書を習い
わたしも教えるのに張り合いがある
教え始めてほぼ1か月
孫がいきなり　無茶を言う
「あしたぼくがばあちゃんの給料をもらいに行く
ばあちゃんには1銭もやらない」と
四荀(4)怒って無茶を言う
わたしは女書教材と鍵をもち
4月3日はテレビの取材
テレビのあとで甫尾(5)へ
四荀はわたしを甫尾へ送り
鍵はどこかと聞いてくる
鍵を取り出し手渡して
うちへ帰らせ女書を教えさせる
学校の先生に言われたとおり
3日とまって家へ帰る
まる3日甫尾にとまって
4日目に桐口村(6)へもどる
自分の部屋へ入ろうとして
わたしは孫に阻まれた
うちでたくさん女書を書いて
いっぱい女書を書くのが本分
朝早くから起きだして心静かに女書を書く
昼すぎ外で涼もうと
家の出口でまた阻まれた
冷たい眼つきで行くてを遮る
まるで牢に閉じこめられたよう
牢を出ても看視され

(4) 4番目の孫の名

(5)結拝姉妹のいる村

(6)義年家が次女の一家と一緒に住む村

娘[7]の心はわからない
娘は親子で無茶を言う
４月７日の夕飯のあとは
婿と孫とでわたしを責める
四荀が精算を持ちかけて
わたしは応えて計算をする[8]
わたしは娘を17まで養った
宝を抱くようにだいじに育てた
娘も家もぜんぶ与えたのに
婿は田んぼがないと　今さら罵る

(7)次女のこと
(8)女書を教えた給料を

3　50年代に産婆をした

56年に見文[9]が生まれ
58年また孫生まれ
その年人民公社が成立した
村長はわたしに産婆をせよと言いつけた
書記が自らわたしに命じた
保健箱を管理せよと
わたしは産婆をしたことがない
やり方知らず仕事ができない
病院で研修を受けなさい
その日当も出すからと
こうして３年保健の仕事
大隊[10]は食糧もあれば金もある
産婆をつとめて10数年
赤ん坊とりあげ２元50
年に10幾人かをとりあげた

(9)初孫（男）の名
(10)人民公社の、下部の単位
公社→大隊→小隊の順

4　孫の難題

「あんたは養ってもらう必要はない
家に金を入れろ」と孫は言う
毎年家に400元入れろと
産婆つとめて120元
炊事の手間賃年に120
娘はわたしをばかにする
わたしに後ろだての身内がないといって

5　生い立ち

祖母（母方の）竹生は５人の子どもを生んだ
女２人と男２人(11)
母は28でやもめになった
父は若くして亡くなった
わたしがわずか４つのとき
妹は１つで　覚えていない
27歳で父は死んだ
母子３人あとに残して
母は28でやもめになった
里の親たちたいそう憂え
叔母叔父みんな心を痛め
いつでも里に帰るがいいと

(11)母を人数に入れていない

6　結　婚

いつしかわたしも17になり
祖父はわたしを嫁がせた

桐口村の盧全のもとに
夫は兄弟３人で
はじめは盧家は円満で
わたしも心から父母に仕えた
ひとりの弟とひとりの妹
悩みもなくて一家幸せ
嫁に来てから３、４年
娘生まれて心も嬉し
娘が１つになったころ
思いもよらぬ姑の虐待
わたしがこっそり卵を食べたと
どの仙人も証明できず
姑はわたしをひざまずかせ
土を３口かませてわたしを呪う
この先いいこと何もなしと
３年呪われ子を亡くし
昼夜泣いて腸(はらわた)を断つ
いっそ自ら首くくりたい
舅郷(12)へ出かけて行き
いくら泣いても舅は知らず
夫も郷へ出て学校の教師
母のいじめをだれも知らない
あれこれ考えても名案浮かばず
夫の帰りを待つほかになし
昼間は姑のそばにつきそい
夜は姑と同じ床に寝る
夫帰ってくわしく話す
よくよく聞かせて夫は了解
すぐさま夫の言うことは

(12)上江墟郷の中心部

賢い妻に勧めよう　心に留めずに忘れよと
お前は教養と徳ある女
父母に尽くせば四方に名声
われら夫婦はまだ母の意にそわない
親の恩には報いよう

7　息子の病死

甲戌[13]の年に息子が生まれ
きょうだい分家し　かまどをわかつ
分家後３年たったとき
息子にひどいできものができ
治療に費す何十万[14]
人も財産も空になる
丁丑[15]の年２月
２月５日に息子が死んで
父母泣いて天地が動く
わたしの泣き声腸を断つ
朝から夜まで泣き暮らし
昼夜泣いて時がたち
夜も眠らず泣き明かす
夜っぴて泣いて気も沈み
息子のかたこと思い出し
信じられない息子の死
息子育てれば老後も安心と期待したのに
だれか知る　醜い命[16]は福がない

(13)1934年
(14)民国時代の貨幣単位による
(15)1937年
(16)きわめて運が悪いこと

8　夫と死別

2月に息子をうしなって
9月に2番目の娘を生んだ。
9月10日に娘をもうけ
9月20日に義弟が死んだ
その次の年また9月
9月24日夫が死んだ
娘が丁度1歳になり
2つの花を残して逝った
12月夫の実家にもどり
一家の団欒父とりしきる
わが子を亡くし　気がふせぎ
夫も喪い　泣きくずれ
29歳空房を守る
心さけ　腸断ち　気はふさぎ
前世に悪を積んだのか
現世はやもめになる運命
夜どおし眠らず泣きあかし
子を泣き夫（つま）泣き時すごす
昼間もまるで夢のこと
夜は夜であの世にいる如し
天に行こうにもいく道なく
地に入ろうにも門もない
夫頼れば安楽と　すがっていたのに
百年わたしを害うと　だれがいったい教えたか
夫と一緒に年とると思っていたのに
だれか知る　わずか13年で別れるとは
夫と妻は松柏のごと　ともに生きると思ったに

だれか知る　今夫に先立たれるとは
寒さの時も　夫にそえば暖かいのに
だれか知る　今雪に霜を重ねる身
前世でこうなると知りたかった
現世は行くべき道もなし
毎日毎日死ぬほど泣かせ
醜い運のわたしを毎日泣かせ
前に夫(つま)なく家に主なく
後に子[17]もなく　よりどころなし
醜い運命ととことん悪い
娘が大人になるときを待つ
柱にひもかけ　首くくろうと思いもしたが
２つの花を捨て難く
夜中すぎても心はふさぎ
涙で布團をぬらす日々
悲しみ嘆いて　時たつを知らず
老いて息子なく　孤老の身
娘のときも悲しい暮らし
嫁になっても　情けないことばかり

(17)この歌の中で、「子」は息子だけの意で使われている

9　日本軍の侵略

33年[18]　日本軍がやってきた
母子逃げまどい　苦難に当たる
娘の手ひき　山中に逃げ
米かつぐ夫(つま)なくまた涙
苦労に苦労をなめつくす
幼い娘に頼るすべなく
洞窟に隠れて心細く

(18)民国33年＝1944年

外では雪霜の寒さに耐えず
夜どおし棠下嶺[19]まで歩き
大雪に見舞われ　身を隠す所なし
日本兵は義弟をつかまえ
母子あわてて天に叫ぶ
他人(ひと)には夫(つま)あり　食糧かつぐ
哀れなやもめはひとりで当たる
２人の娘はまだ年若く
２人をひきつれ山に隠れる
他人(ひと)には夫(つま)あり　住む小屋つくる
わたしは夫(つま)なく　住む小屋もなし
歩き歩いて涙を流し
泣いて泣いて山林に入る
伯父たち[20]心に哀れんで
みかねて小屋に入れてくれ
山に住むこと数か月
厳寒に耐え雪上に眠る

(19)義年華の生まれた棠下村の山

(20)夫の父の兄弟

10　中国解放

35年[21]　舅が亡くなり
８月姑また金せびり
36年　また家を分かつ
耕す牛なく　買わねばならず
37年　大牛を買う
冬にこの牛ぬすまれて
翌春　耕す時期が来た
耕す牛なく　田を人に貸す
この年８月解放軍がやってきた[22]

(21)民国歴＝1946年

(22)1949年中国共産党が次々に全国を解放していき、このあたりを解放したのが８月

解放の前に食糧を徴収され
翌年３月また食糧を出せという
１年の収入で２度の徴収
全国解放支援のため
金の代りに柴を納める
解放のとき次女12歳
長女はそろそろはたちのころ

11　長女結婚、土地改革

50年[23]　長女を嫁がせて
もたせた道具は他人に及ばず
解放３年目食べる物なし
耕す者には米あるが
哀れなやもめは耕す夫(つま)なし
頼りになる子も身辺になく
わたしの妹が助けにかけつけ
続いて　姉も慰めに来た
食べ物なければうちに来て
うちに住んでもかまわぬと
妹はわたしを東塘[24]に呼び
軽い話にわたしの心をほぐす
心尽くしてわたしを慰め
「娘が育てば恩を返すはず」と
心尽くして慰めて言う
「うちでいっしょに住めばいい
娘と一緒にのんびり暮らし
娘はいずれ恩に報いる」
十分妹の世話になり

(23)ここから西暦年号になる　1950年

(24)妹の住む村の名

ときどき米を墟場[25]に送る
土地改革で田んぼを得たが
だれに頼れる田の仕事
中農の身[26]と定められ
土地耕せなくて愁いは深し
思えば　田あれど耕せず
田の取り上げを政府に頼む
4年目再び審査あり
自分を下げてと上級[27]に願う
土地を他人に貸し出して
9畝[28]から収益あるが　4畝からなし
やもめに田あれど耕す人なし
他人に頼んで耕せもせず

(25)上江墟のこと

(26)身分を①貧農②下中農③上中農④富農⑤地主、の五段階に定められ、①②はプロレタリア③以上はブルジョアとされた。ここでの中農は③に相当する

(27)上級組織

(28)1畝は約1アール、日本の1畝に相当

12　次女に婿をとる

次女は2歳でいいなづけあり
白巡[29]に住む田のある家柄
合作組[30]が成立したが
娘の婚家も助けてくれず
村の三哥[31]がわたしに求める
娘を自分の息子にほしい
福成[32]を仲人に頼んで言ってきた
福成を呼びわたしは伝える
「はっきり三哥に言ってほしい
『田あり食うにも困らずに
三哥に息子3人あり
末の息子をわが家にほしい』と」
福成　三哥とかけあって

(29)上江墟鎮の村の1つ

(30)人民公社の前の組織

(31)同族の縁戚の3番目の兄

(32)仲人の名、姓は不明

末子は婿入り同意した
三哥も認めてやれやれ安心
わたしも嬉しく婚約結ぶ
すでに三哥夫婦は福成に言う
末子を婿にやれば年華は喜ぶ
年華が同意すれば
双方即座に婚約なり立つ
三哥わたしの田の良さを見て
末子をやってもいいと判断
娘　このとき17歳
あとつぎできてわたしは安心
婿をわが家に迎え入れ
心のそこからわたしは喜ぶ
ふたりは３男１女を得た
56年に初孫生まれ
58年　公社が成立し
その年次の孫の誕生

13　再婚して白馬村へ

わたしは若くからやもめをとおし
今になっても人並みになれず
娘とすごせると思ったはまちがい
他村へ再婚せよと娘は迫る
58になった甲子の年(33)
再び白馬村(34)へ嫁ぐ
思いにそむくとだれか知る
誤りの契り人に及ばず
白馬村に来て17年

(33)甲子の年は1984年であるが、義年華が再婚した58歳のときは1965年なので矛盾する。後に桐口にもどった年と混同しているらしい

(34)黄甲嶺鎮白馬村

夫の娘は実子に勝る
ただただ怨む我が身の不運
またまた夫に先立たれ
哀れなやもめは頼る人なし
涙にくれるが行くあてもなし

14　桐口村へもどる

再び実の娘の話
長女は妹のひどさに気づく
親やしなわぬ妹と知って
姉妹は家を２つに分ける
５月　見文(35)わたしを迎え
家に迎えられ心安らぐ
甲子(36)の年11月
１日　桐口村へ帰り
３日に湖北のテレビ局来訪
テレビの撮影につきあった
12日　上の孫が手紙をよこし
手紙は見たが孫は見ず
孫を見てから心喜ぶ
喜び重なり　なお心はずむ
はたちの子らの祖母となり
翌年２月次女の家に帰る
帰って10日と経たないうちに
夫婦ともども言いがかり
わたしが人を死なせた(37)と娘罵り、
「ゆえなく夫に殴られるのはあんたのせい」
孫らも口出し加勢する

(35)次女の長男

(36)1984年

(37)娘の父である先夫や再婚の夫、息子が死んだことをいうらしい

婿は気荒く言いつのる
「親戚中でおまえがいちばん年上なのに毎日出かけて家るすにする」
怒声やめてと彼をなだめる
だれかが過てばだれかが罵る
すでに棺おけそなえてあるが
蓋ない河に身を投げられず
また冬がきて11月
娘は口を開いてまた小言
下屋で洗濯しながら言いだした
「あんたは仮病をよく使う
おしと言うけどよく話す
男書(38)も女書もよくできる
龍鳳の剪り紙も人に喜ばれる
わたしの面子をなぜ立てぬ」
年華答えて娘に聞かす
「決まった運命どうしょうもない」
夫婦は鉄をうつごとく
毎日毎日わたしを打つ
今老いさらばえて80歳
聾唖のふりして年すごす

(38)この地では漢字のことを男書とも言う

15　アメリカ人来訪と娘婿の罵言

去年の丁度10月に
10月１日　踩橋の祭り(39)をみ
アメリカ学者甫尾に来る
わたしも呼ばれて甫尾へ
３人の姉妹(40)一同に会し
２人の貴賓とても喜ぶ

(39)新しい橋の完成を祝う祭り

(40)結拝姉妹

昼すぎ長女迎えに来
わたしを新宅[41]へ連れ帰る　　(41)長女が住んでいる村
次女新宅へ迎えに来
姉はわたしをかくまうと言う
次女は桐口へわたしを連れもどり
家に入るなり婿が罵る
「あした早起き新宅へ行け
ずっと新宅にいるがいい
もしも死ぬ日になったなら
姉婿おまえの死に水をとる
おまえは俺の生母でもなし
たとえ生母でも世話焼かぬ」
それ以後わたしをだれも見ず
一家をあげてわたしに口きかず
他にしかたなく書記の家に行き
いちいち話せば書記は了解
夜　母と子[42]が相談し　　(42)次女とその子
手紙を書いて上の孫を訴えることにする
結拝姐妹これを聞き
甫尾に招いて慰める
数日たって上の孫が手紙を書き
４番目の孫が持ってきた
手紙受けとり読み始め
しまいまで全部読み終えた
初めの数行はいいことば
「あんたに孝心もっている」
それから後は話にならぬ
「おばさん　あんたをかくまって
あんたはどこでもいくがいい

どこで死んでもこっちは知らぬ
また桐口にもどりたくなり
帰りたいと言ってもみな承知せぬ」
ふたつみっつの飴なめても
娘はそんなになめるなと言う
孫嫁も家では同じ扱い
孫の子見ればいとしくて
曽孫に与える10元の金
2回与えて20元

16　病　気

甲子の年[43]12月
15日に病気にかかる
いろりに坐って動くもたいぎ
3度の食事も食べたくない
3番目の孫だけよく世話してくれて
わたしの世話した最初の子ども
町へ買物に出て行って
みかんと果物買ってきた
再び毒ある娘の話
ゆえなくわたしを罵り倒す
わたしは家で安楽に過ごすつもりが
自分がどうまちがったかわからぬが
10月[44]背中にできものできた
痛さに昼夜苦しんで
医者にみてもらおうと思ったが
娘に頼んでも金くれず
重病患いほんとに辛い

(43)14と同時期のことにもどっている
(44)同じ甲子の年か、前年か不明

そろりそろりと上江墟まで歩く
長宝[45]ひと目見　心を痛め
身に持つ４元貸してくれた
医者は龍会[46]に行かねばいない
車に乗って龍会に着く
娘[47]はわたしが病むと見て
服を脱がせてはっきりと知る
婿一目見て心を痛め
すぐ医者を呼び注射打つ
４日通って病気が治り
義理の娘はわが子に勝る
昼夜気づかいわたしに仕え
餅や果物欠かさずに
義理の娘はどの子もいい子
わたしに仕えて孝養尽くす

(45)知人の名らしい
(46)上江墟鎮の１つの村
(47)再婚した夫の娘

17　幹部が労わる

龍会に泊って20日
その後再び町へ行く
再び町に半月とどまり
文化館[48]に身をおき安らかに
白水の２人[49]迎えにき
街から白水へわたしを連れる
親戚の娘はほんとにいい子
安らかにすごせと慰める
孫嫁たちも口々に言う
「わが家でゆっくりしてください」と
白水に20日あまり住んだとき

(48)県の文化方面を担当する事務所、その職員の住宅も兼ねる
(49)消江鎮白水村の親戚の人

四荀白水にやってきた
四荀みるなり「ばあさん」と叫び
「おれはあんたを迎えにきた」
親戚の娘婿こたえて言うに
「四荀おまえはきょう家に帰れ
おまえの父母呼んでこい
わたしもおばあさんを送っていく」と
省　県　郷と３つの幹部
わたしの苦労を慰める
昼まで幹部はテレビを撮し
昼からわたしを家に送り
仲よく暮らせと家族を説得
美成[50]　迎えにきて家に帰る
婿の父子が迎えに来
３人の幹部が家に送る
わたしは家に帰りたくない
むごい仕打ちをうけたくない
幹部ねんごろに慰める
婿が迎えて家に帰ろうとする
上級の幹部が一緒に送ってきて
美成　口を開いて悪口叩く
「ばあさん勝手に１人で出かけ
孝行したくもさせてくれない」
幹部一同事情をききとり
みんなわたしに心痛める
郷政府の趙書記が言う
「家が辛ければまた来なさい」と

(50)孫の名

18　再び病につく

家に帰ってまた看視され
圧迫されてわたしは悲惨
霜雪の時炉端に坐り
床にわたしを横にさせ
無理やりねさせて辛いしうち
80のわたしは耐えがたい
昼夜わたしを床にねかせ
外へ出ぬよう看視して
娘はいつでもいい顔みせず
娘が母を看視するとは
幼い時から養って
今に至って仇人となる
前世になにか怨みあり
現世で虐待して仇を打つ
前世の怨みは前世で晴らすべきなのに
思えば娘を宝のごと
老後に備えて大事に育てた
大事に育てても目先まっくら
再び娘のむごさを話す
我が子でなくて賊と言うべき
５月５日の夜半に到り
とつぜん腹痛　歩くもかなわず
夜なかまっくら灯もなし
厠に行けば婿は罵る
日に日に暮らしが辛くなり
ほんとに生きるは難しい
わたしは家で憂えるばかり

19　政府へのお願い

娘は女書を書くことも許さず
できれば別の家に住みたいが
この身で炊事も難しい
どうか政府はわたしの面倒みてほしい
養老院にいれてほしい
院に入れば暮らしも安心
院で安らかに女書を書く
今すぐわたしを救いだしてほしい
年が明けたら党の恩に報いる
今の毎日ほんとに辛い
いつ家を追われるかわからない
世にこんなひどい婿がいるとは
きけば世間もびっくりしよう
娘を生んでまちがって　やもめになったもまちがいで
娘を育てて自分を害う
ことしの２月12日
婿がまたまた言いがかり
米をやるから自分で炊けと
米を分かちてどこへ行く
米をくれてもたき物くれず
野菜煮るにも油もくれず
夫婦２人はいっせいに言う
大隊へ行け　油をもらえ
13日夜　湯をわかしたいが
婿は燃料の柴をくれない
14日二孫(51)が作ったかゆ食べる
婿は豚肉の分け前もらう

(51) ２番目の孫

年よりは　ご飯がのどを通りにくい
わたしは年とり先が短い
夫婦を郷長に訴えたい
足もよろよろ生きにくい
「たとえ郷政府に訴えても
おまえに家売る権利なし」
わたしに向かって罵詈雑言
「食べても何も役立たず
おまえは実の母でもない
父母を養わなくても仕方がない
きょう　おれはおまえにはっきり言う
死んでもおまえの死に水取らぬ」
天に叫べど天はこたえず
地に叫んでも聞き入れられず
娘またまた罵り続ける
「不服があるなら政府へ行け
歩けなければ犬這いで行け
いくらあがいてもしょうがない」

20　女書を教える(52)

(52) 1 の14行からと内容が重複している

去年何人かの幹部が来て
わたしに女書の教室を開かせる
去年の２月に始まって
続けて３カ月余教え
習う子あわせて20人
別々に入ってそろって卒業
女書習うといいことあり
歌を歌えば心も晴れる

とはいえ病いのある体
少女ら菓子もち見舞いに来
少女らわざわざ見舞いに来
心は晴れて悩み忘れる
４月に村で豚殺し
豚のスープをぜひとも飲みたし
娘　政府にわたしの金ありと知り
甘いことばで巧みに話す
あれこれめぐらし金をねらう
さっそく四荀を呼んでくる
四荀がかわりに取りに行き
わたしが教えて孫が金とる
昼間わたしは四荀に教え
夜は教室で教えて取りに行けない
四荀は事情がよくわかり
ひそかに政府へ行き　金を受け取る
陰険な手段で情けない
わたしに対して半銭もくれず
今日に至るも　いくらあったかわからない
わたしの心も何も知らない
こうした金を得なくとも
人々のため奉仕する
女書の教室おわっても
わたし１人のことでなし
政府はわたしに気を配る
政府の恩に背かぬよう
恩情受けて心にしまい
時々刻々と心に刻む

21　家を整理したい

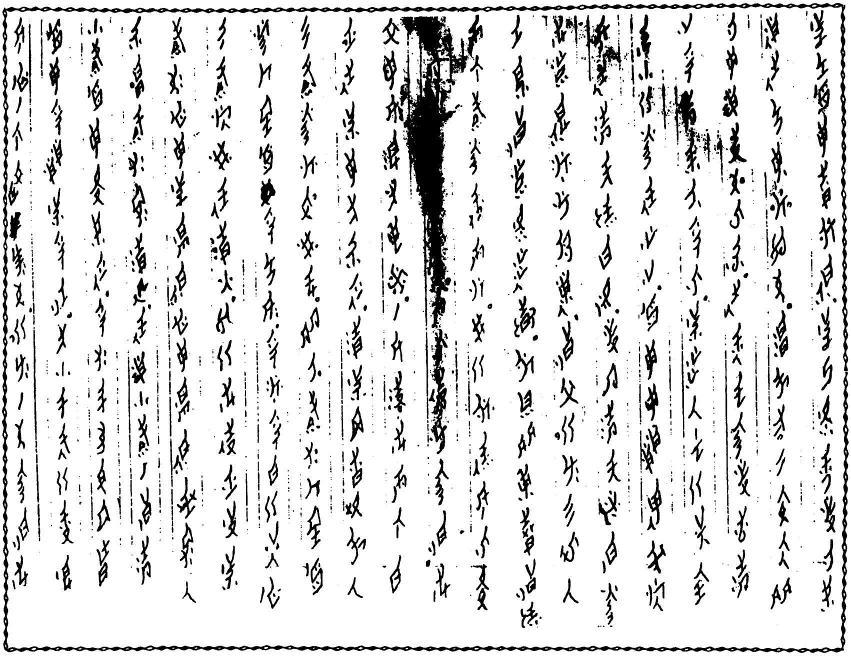
できれば早く家を売り
政府にすっかりゆだねたい
わたしは養老院に身をあずけ
心のどかに女書を書く
ほかのやり方浮かばない
なんとしてでも　始末つけたい
２人の娘は　はっきりわかる
姉妹の怨みは家屋が理由
豚のスープがほんとに飲みたい
４月に村で豚殺し(53)
孫は４両(54)の肉を買い
４日に分けておおぜいで食べる
婿やってきて大声でわめく
「お前は肉買い　自分だけ食べる」
すぐさま答えて真実を言う
「４両の豚肉みんなが食べた
４両の豚肉買ったのは孫」
罵られてまたまた涙
いっそ薬で自殺したい
それでも死ぬに死にきれず
ひとつはわたしの老いにつけこみ
ひとつは後ろだてないのにつけこむ

(53)20の13、14行と重複
(54)１両は50グラム

22　最後にまた政府へお願い

政府にすがって救いを求め
すぐにも心おちつきたい

娘ら同じく財産ねらい
勝手に政府の金を持ちだす
育てなければよかったに
死後も娘らの心煩わす要もなし
棺おけ早々準備して
娘は親不幸を免れた
今日は政府はよくしてくれて
まわりの人はいい人ばかり
みなやってきてわたしを助け
まず衣食のこと解決してくれた
いきさつ　ざっとこの通り
少しのうそも入っていない
天に誓うわたしには良心ありと
信じないなら親戚に聞け
昔のことはもう言うまい
いいこと悪いこと口に出さず
今までどうすることもできず
やっと政府にほんとのことを言う
わたしの悲しみ極まって
すべてを言わずにすまなくなった
いいことはどんどんやってほしい
わたしの命を救ってほしい
病気になったらすぐ追い出される
わが家にいることできなくなる
政府はわたしのためにやってほしい
わたしの怨みを晴らしてほしい
死んでも共産党を忘れない
ご恩は終生忘れない



「何艶新自伝」の第１ページ

何艶新自伝

1997年２月作

1　父のこと

ひとり部屋に坐り　夜もすがら想う
自ら文をしたため　苦しみを訴える
わたしは何家に生まれた女
まずはじめから述べてみる
口に出せば刀で割くが如く
辛い運命苦しい思い
上に兄なく下に弟なし(1)
家は潰れて　あとつぎもなく
幼いときから父はなく
やもめの母が家のきりもり
はじめ青天に赤き日昇る
だれか知る　その青天に白雲覆うを
かつては花よと　もてはやされ
同じ父から３兄弟(2)
祖母の家ではのびのびと
あかり煌煌一家だんらん
２人のおじとおば２人(3)
うれいも知らず仙洞のごと
だれか知る　家運かくまで変わろうと
２人の兄もなくなって(4)
父母の悲しみ断腸のごと(5)
１年に子を２人もなくすとは
重なるときは重なるもので

(1)筆者（何艶新）の父親のこと

(2)男の兄弟だけ、父も含めて３人

(3)筆者の父のおじ、おばのこと

(4)筆者の父の兄のこと

(5)筆者の父の父母

再び不幸に見舞われた
下のおじさん[6]戦争にとられ
おばさん[7]ひとり　ねや守る
ひとりずまいに気も晴れず
娘も息子[8]も恵まれず
夫は遠くへ行ったまま
たよりもなければ　ことづてもなし
おばさん　心に思うには
いっそ　他家に嫁ぎたい
さておばさんはこの辺で
おじの昔の話をしよう
おじは家でもかしこくて
子どももなくて淋しいくらし
家に妻なく　しきる人なし
あれこれ相談する人もなし
最初にめとるは欧陽家の女
生まれた娘は早死にをして
２度目の嫁は義家から来たが
子どもも生まずに世を去った
３人目の嫁は黄家の娘
息子１人に娘を３人
おじの運勢強すぎて
３人の妻早死にす
祖父は３人息子を得たが
そのうち２人は後つぎがなく
あわれや祖母は心をいため
苦労千万かいもなし
一家の悲哀は語り尽くせず

(6)筆者の父のおじ
(7)筆者の父のおば
(8)筆者の父のおばが

2　父が地主に殺される

さてここからは父母[9]の苦しみ　　(9)筆者の父母
民国31年[10]　横暴非道　　(10)1942年
地主に父は殺された
父は倒され地面に転がる
無法を訴えるすべもなく
ことば返せず　ただ殴られて
銃刀の前に声も出せず
たとえ半句も逆らえば
威ばり散らして脅かす
父を起こそうとした母も
ひどく殴られ　血しおをあびる
父を殺して　なお足りず
全ての家具を運び出し
広間に母を押さえつけ
他人に知らせることを許さず

3　母の実家へ帰る

母子2人は行く所なく
夜どおし歩いて実家へ帰る
祖母驚いて何事ぞこんな夜分に帰るとは
涙流して母は言う
地主が夫を殺したと
話をきいて祖父はかんかん
火のごと怒って告訴せん
涙流して告訴状書く
地主の親戚じゃましてふさぎ

祖父他の道を考えて
夜どおし歩き甫尾へ行く

4　役所へ訴える

母は水路を船で行く
訴状をかかげて役所に入る
法廷の前にひざまずき
役人に告訴を申し出で
訴状の紙を呈上す
役人うけとり訴因を読むが
告訴を役人とりあげず
母を罵倒し　追い出した
母は哭き哭き家にもどり
祖父と改め相談す
永明(11)政府は犯人とグル
やむなく上の桂楊州に告訴する
祖父母つれだち桂楊州へ
訴状を手にして役所に入る
えんえん哭いてひざまずき
清廉な役人に訴えた
「訴えたいことここにあります
役人さん　分別をつけてください
７つの穴(12)から血を流し夫は無惨に死にました
家は破れてあとつぎもない
わたしはもともと陳氏の出
嫁いだ夫の姓は何名は旺
殺人犯の４人を訴えます
首謀者の名は何漢松

(11)江永県の古い呼び方

(12)穴が目に２つ　鼻に２つ　耳に２つ　口に１つで計７つになる

お役人さま　どうかよくお調べください
善悪と真偽とをどうか見分けてください」と
訴状を掲げてさし出した
役人手にとり　よくよく読んで
清官ただちに一計めぐらし
手に筆をとり　はっきりと書く
永明政府に伝達し
役人に白黒つけるよう
政府は文書を受けとって
警官何家に直ちに送る
犯人４人をつかまえて
ただちに水牢へ送りこむ
ついで犯人を法廷に呼び
事実のいかんを自白させ
犯人それぞれ犯行を認め
家財賠償３万6000元[13]

(13)民国時代の貨幣

5　日本軍がやってきた

この処理がまだすまぬうち
日本軍村へやってきた
牢獄こわして打破り
犯人４人は逃げ去った。
家財はなにも償われず
再び桂楊州へ頼みに行く
頼まれた役人言うことに
「永州すでに決めたこと
ご主人一命落とされて
気落ちなさるは無理もない」

清廉役人やってきて
「奥さんどうかご安心
実家に身を寄せお待ちなさい
情報得次第知らせます
犯人家にもどってきたら
必ず仇をとってあげます
いまは行方がつかめません
わたしもはっきり言えません」
母は泣き泣き帰宅した
いつの日夫の仇がとれる
祖父母ともども慰めて
少しは気晴しするように
「古来善人難多く
九度の困難十度の苦悩　終えてようやく人となる
人は人の上に立つこと難しく
仇には仇を　恩には恩で報いるもの」
母親答えて祖父に言う
「わたしは前世の修業が足りず
父母の教えが貴くて
笛や太鼓で私を送り
何家に嫁いだ道すがら
梅の香包んだ袋はなさず
あのころ何家はにぎやかで
兄妹あいつれ５人いた
家運が急に傾いて
他人に見劣りするようになるとは　だれが予想した
前世に悪事を積み重ね
何家を落として辛苦を味わせ
心は湖水の荒波のごと

ものごとさばける人もいず
自らあわれみ自らいたみ
四方ふさがり　いくところなし
天にのぼるに道はなし
地にもぐるにも門はなし
湖水にいっそ身を投げたくても
１人の娘を捨てがたし」

6　祖父の死

祖父は怒りに肝を断ち
民国34年　この世を去った
母はひざまずき　傷心に哭き
いま我が命だれに頼らん
祖父は陰府に命を落とし
父の仇をとる人もなし
母子２人は祖母の家に住み
操を守って10数年

7　生まれて故郷へ帰る

しばらくたって中国解放
毛主席の指導のもとに
父の仇をはたしてもらい
母と子２人故郷に帰る
家をまたいで目に入る光景
家財道具は何もなく
部屋に入るなり母大声で哭く
我が父(14)帰らざるを哭く

(14)筆者の父

今や毛主席のおかげをうけて
日々の暮らしの金を得る
土地改革で田も得たが
これまたつぎつぎ「難」の字起こる
父のいる家　水利も順調
父ないわたしの稲枯れはてる
田を耕すも人手なく
稲まく人を頼むも難し
夜ごと夜すがら哭きくれる
おじも救いの手をのべず
母親先に道なしと
わたしを連れて再び嫁ぐ
思えば先方　運勢悪く
花を移しても育たない
再び嫁して子を得たが
生んだ子すぐに死ぬ運命
結婚重ねて幸せもなし
ただ雪に霜を加えるだけ
おじおば慰めにやってきて
「娘をかせがせ孝行させよ
今の世すでに解放され
村内同姓縁が結べる[15]」
娘のわたしは母に言う
母はわたしに耳を貸す

(15)解放前は村内で同じ姓のものは結婚できなかった

8　意に染まぬ結婚

今は娘も成長し
母はわたしを嫁がせる

だいじなことは父母が決め
わたしに婚姻決める力なし
わたしは焦っておちつかず
７日７晩一睡もせず
母の足もと　ひざまずく
声高くして哭いて言う
「もしもあなたに仕えるならば
家でたくさんかせげよう
いったん他家に入ったならば
娘の運命逆らえず
父と別れていくばかり
このたび男子を得たならば
長じて父の名を塡める
あなたは見透す力なく
目の前にある花水に活けず
いい花々を役立たせず
牛の糞にさせてしまうのか
娘のわたしをおさえつけ
生涯ひとつもいい思いせず
想えばわたしの運勢拙く
選ばれた夫も他人に及ばず
母さんほんとに情けない」
それきく母は心裂け
昔の地主の圧迫を
娘に詳しく言いおこす
「上にレンガなく　下に土地なし
一寸の土地なく　身置く所なし
父さん死んだときあなたは幼く
あなたのために操を守った

水に魚いなければ　えびが貴く
息子なければ　娘が役立つ
おまえ背負って法廷に立ち
骨の髄まで寒さがしみた」
母は28でやもめになって
娘育てて14年
おもえばひたすら部屋にいて
どこにもすがるところなし
母と娘２人いくところなし
いちどは他家へ再婚もした
人の運命八字(16)で定まり
貧に泣くのをだれか知る
今では母も年をとり
ゆく末だれに頼るべき
お前を嫁がせようとても
お前は願いをききいれず
恩知らずだと母は言う
娘のわたしはひざまずき
長じて忘れる父の恩
母の意にそいたいと　心の中で思うけど
わたしの一生つぶされる
２階で自ら殺さんと思えど
あわれな母を捨て難し
むかしの母の苦しみを思えば
肝と心を刀にて　割くが如くに心はいたむ
思いつ哭きつ夜もすがら
逆らえぬ運にただ「難」の１字
老母のよるべなさをあわれみ
老後ひとりの淋しさをおもい

(16)吉凶を占う文字

右へ行っても難しく　左へ行っても苦労ばかり
道あやまれば　行ない悪く
母の気焦り　憂うをみれば
娘は孝心なきがごとし
息子を育てて母の辛苦知らず
娘を育てて父の恩に報いず
10月みごもり母は苦しみ
父母の恩に報いるは人の道
ついにわたしは　母に答える
「貧しい人に嫁いだら他人に頭が上がらない
無理な結婚強いるなら
一生涯は歓びもなし」

9　夫のこと

連れ添う夫は心根悪く
わたしを苦しめ　いく星霜
はじめの不安は吹きとんで　4人の息子と2人の娘
子が多ければ肩の荷重く
家に水なく船こぎ出せず
母は気苦労絶えぬまま
82歳で世を去った
家人が死ぬと家々はにぎやかに
ひつぎ飾って丘へ送る
母を思えばとむらいも　他人とちがってひっそりと
息子いなくて孫もなく[17]
ただひざまずき哭きわめき
外孫わずかに送るのみ
母との死別はさておいて

(17)母が息子がいないから内孫がいないこと

夫の話を続けよう
今だに傷心に哭いたのを思い出す
父母死んで再びかえらず
家へ帰って気がふさぎ　悲しみ訴える人もいない
夫の兄弟悲しみわからず
わたしの運勢悪いため
夫に苦労をなめさせる

10　夫の入院

去年は家に大不幸
夫に煩いの星がつく
夫が入院してからは
心の愁いすさまじい
年こしの日も病院ずまい
子どもを思い不安は去らず
子らは家にて涙を流し
正月節句も　まどいもできず
わたしは病院で夫を救う
涙流して12時間
寒の冷気に火ばちなし
わたしの体も弱いのに
ようやく家に帰れたが
養生の金なく　回復おそく
夫をみては気があせり
眼ははれあがり　顔あおざめて
困窮すれば不幸も多く
夫の罵言をだれか知る
夫のことばは千斤の重み

わが腸そいで　割くごとし
「お前の毒でわたしは迷惑
娘に金ため　わたしにけちる」
「子どもはあなたの子でしょうに
まま母生んだ子でもなし
わたしの心が離れているなら
なぜ金借りてまで　あなたを治す
千般の苦労　みなあなたのため」
なにゆえ　かくまでひどく罵る
ひどいことばが身にささる
憂いを晴らせる人ほしい
おもいつ涙し心はふさぎ
わずかの妻子の情もとどめず
夫の生まれは悪くはないが
わたしのせいで意地を張る
夫のことばに情はなし
入院のときに話をもどす
夫のベットに私も坐り
夫と同じ苦難を受けた
辛酸すべてなめつくし
霜を身につけ雪上に眠る
夫のことばは刀で割くよう
わたしの我慢も限りあり
女はすなわち真心の女
男はだれでも冷たい男
よき馬　くらはふたつはつけぬ
よき女　２人の男に添わず
１馬に　くらふたつ坐り難く
１女に２夫あれば醜名高し

１つの星には１つの月
乱れた星は月伴わず
いっそ坐して餓死を待つか
60再婚も難しからず

11　夫と別居

無情な夫に　わたしは傷つき
ただいま　夫はわたしと別居
別々に住み　別の田耕す
母子四人あわれにすごし
なにひとつなく　みじめな暮らし
息子長じて今や成人
少年の日に親の別居
嫁いだ日から30年
別居しようとだれか知る
それ以後　刀で心を割くがごと
手にものつかずもの言わず
思えばいやな結婚強いられて
はがねで腸を切るごとし
幼いときから読み書きできて
父母のしつけも気にならず
夫婦仲よくすごすなら
夫婦そろって老後も楽し
前世の悪の報いのせいか
この世で人から醜名あびる
夫が導けば　妻も貴ばれる
家中の不和には　他人がつけこむ
いまだ優しいことばは聞かず

ひどい仕打ちはみな受けた
生んだ子どもは６人で
息子２人は家をもち　娘１人は嫁に行く
残る２人の息子と１人の娘
重き責任を自ら背負う
父のもと生まれて父に養われず
この世に父親なきがごと
時には怒って腸断つごとく
世の人わたしを悩ますばかり
夜な夜な徹して哭きあかし
心はうつろ雪のごと
目先のことで焦らずに
遠い先を考えろとおじの慰め
捨てても熔かしても捨てきれず
子に望みかけ　孫を抱く
昼は孫抱き　気も紛れるが
夜はひとりね　矢が心射る

12　女書で有名になる

名声周囲に伝わりはじめ
あたりの人々わたしを嫉む
ひとり部屋にいれば気もふさぎ
手に筆をとり　女書を書く
昼のひなかに涙を流し
女書書きだせば　夜更けまで
１句考え１字書き
行ごと字ごとに血したたる
五更(18)に至りてねしずまり

(18)朝の４時

1対の[19]鶏鵝が時を告げ
着るもの脱いで床につくが
まばたきせぬまに朝になる
ことわり百千言い尽くせずに
生涯万般あわれみに満つ
このあわれ述べて世に出す
万古千秋　名を後世に伝える

(19) 1対の鶏と1対の鵝鳥